

## 『無量寿如来会』の特徴と問題点

——親鸞聖人との関連において——

林 昭 雄

凝然の『浄土法門源流章』（大、八七、一九二c—一九三a）に浄土所依の本経について、

「兩卷無量寿経二卷、この経は曹魏康僧鎧三藏の訳なり。

この経、古来新旧の三藏に十二代の訳ありて五存七欠なり。

五存とは (一)此の僧鎧訳 (二)『清浄平等覺経』二卷魏帛延訳

(三)『阿弥陀経』二卷呉月支謙訳 (四)『大宝積経』「無量寿会」

二卷大唐菩提流支訳。彼の経の第十七卷第十八卷にあたる。

『大宝積経』には四十九会あり、此の「無量寿会」は第五会

にあたる。(五)『大乘無量寿莊嚴経』三卷、大宋西天法賢三藏

訳なり」とある。

いま、ここに五存といわれるものの中で第二の平等覺経と同名の経が支婁迦讖訳として現存している。此の両者の関係は明瞭ではないが、いま此処で問題としてとりあげるのは、第四の「無量寿会」といわれるもので、現在では、「無量寿如来会」といわれている。『開元釈教録』卷十一には「第五

無量寿如来会二卷 大唐三藏菩提流支 新訳 右の新訳は旧の無量清浄平等覺、大阿弥陀、無量寿経等と同本異訳なり」とあり、古く中国では西紀第八世紀の当初より『無量寿経』に関心がもたれていたことを知るのである。さらに、中国のみならずインドや西域でも同様であったであろうことは、梵語写本が三十数部もあり、西夏語訳やチベット訳等の存在が、これを物語っている。

西夏語訳については一九七七年に公表された西田龍雄氏の研究によれば「西夏訳佛典目録」の中に漢訳『大宝積経』の西語訳が、しめされている。それによれば、『大宝積経』第五会、卷十七・十八の西夏文写本がレーニングラード東方学研究所に所蔵され、「如来会」卷上の一行十八字の写本が完全に残し、卷下については「復次阿難彼極樂界」から「於晨朝時周遍四方和風」までは欠落しているが「微動不逆不乱吹諸雜花」から「聞佛所説皆大歡喜」まで見ることが出来る。

また、チベット訳については、西藏大藏經の甘露爾の『大宝積經』は勿論であるが、赤松孝章氏の「チベット訳無量壽經の敦煌新出異訳本について」（龍谷大学佛教文化研究所紀要第二十三集）によれば、『大宝積經』の卷十七の一部と卷上の全文が敦煌出土のチベット文献の中に存在することが明らかにされている。

以上、「無量壽如来会」の文献的狀態について述べたが、次にその内容について、ことに阿弥陀佛の本願について、四十八願<sup>(2)</sup>經としての特徴をみてみよう。周知のように阿弥陀佛經典の中で、その本願については、『大阿弥陀經』『平等覺經』が二十四願、『大乘無量壽莊嚴經』が三十六願、梵本「足利本」が四十七願、『無量壽經』『無量壽如来会』が四十八願、西藏訳が四十九願である。これらの願数の相違は異本の成立や性格をしる重要な手がかりになるが、ここでは『如来会』の特徴を願をとおして見ようとおもうのである。

さて、四十八願の願名について、その願名を「無量壽經抄」了慧「無量壽經合讚」（觀徹）等によって示せば次の如くである。

- |     |        |     |        |
|-----|--------|-----|--------|
| 第一願 | 無三惡趣の願 | 第二願 | 不更惡趣の願 |
| 第三願 | 悉皆金色の願 | 第四願 | 無有好醜の願 |
| 第五願 | 令識宿命の願 | 第六願 | 令得天眼の願 |
| 第七願 | 天耳遙聞の願 | 第八願 | 他心悉知の願 |

『無量壽如来会』の特徴と問題点（林）

- |       |        |       |        |
|-------|--------|-------|--------|
| 第九願   | 神足如意的願 | 第十願   | 不貪計心の願 |
| 第十一願  | 住正定聚の願 | 第十二願  | 光明無量の願 |
| 第十三願  | 壽命無量の願 | 第十四願  | 声聞無量の願 |
| 第十五願  | 眷属長寿の願 | 第十六願  | 離諸不善の願 |
| 第十七願  | 諸佛称名の願 | 第十八願  | 念佛往生の願 |
| 第十九願  | 来迎引接の願 | 第二十願  | 係念足生の願 |
| 第二十一願 | 具足諸相の願 | 第二十二願 | 必至補処の願 |
| 第二十三願 | 供養諸佛の願 | 第二十四願 | 供養如意的願 |
| 第二十五願 | 説一切智の願 | 第二十六願 | 那羅延身の願 |
| 第二十七願 | 所須嚴淨の願 | 第二十八願 | 見道場樹の願 |
| 第二十九願 | 得弁戈智の願 | 第三十願  | 弁戈無尽の願 |
| 第三十一願 | 国土清淨の願 | 第三十二願 | 妙香合成の願 |
| 第三十三願 | 触光柔軟の願 | 第三十四願 | 聞名得忍の願 |
| 第三十五願 | 女人往生の願 | 第三十六願 | 聞名梵行の願 |
| 第三十七願 | 作礼致敬の願 | 第三十八願 | 衣服隨念の願 |
| 第三十九願 | 常住快樂の願 | 第四十願  | 見諸佛土の願 |
| 第四十一願 | 聞名具根の願 | 第四十二願 | 聞名得定の願 |
| 第四十三願 | 聞名生貴の願 | 第四十四願 | 聞名具徳の願 |
| 第四十五願 | 聞名見佛の願 | 第四十六願 | 隨意聞法の願 |
| 第四十七願 | 聞名不退の願 | 第四十八願 | 得三法忍の願 |

以上、四十八願文は魏訳では「設我得佛」ではじまり「不取正覚」でおわるという形でとかれている。

ところが同じ四十八願經でありながら、唐訳『如来会』で

は、同じく「若我成佛」ではじまりながら、第一願から第九願、第十四、第十六、第十七、第十九、第二十六、第二十八、第三十三、第三十四、第三十六、第三十七の十願と第四十二より第四十七の六願との都合二十五願は「不取正覚」とあり、他の二十三願は「不取菩提」でおわっているのである。この訳語の相違については明瞭ではないが、願文の配列順序の問題と考えあわしてみる必要がある。

しかし、魏唐の両訳は、願数が一致するだけでなく、例えば、本経の序文の中で列衆をあげた後で、総歎別歎とその徳を讃歎する文は他の異訳には存在しないで、両訳のみにある。といって両訳が完全に一致するかといえば、魏訳で弥勒を対告衆として説かれる五悪段は、『梵本』や『チベット訳』と共に『如来会』には存在しないのである。

ただ、本願については魏訳の十八願が唐訳では十八願に二十願の趣旨が同在しているようにみえる点がある。

また、『梵文』では十八、十九の両願に魏訳の十八、十九、二十の三願が混在するが、此は『西蔵訳』も同様である。その点では『梵本』には魏訳にない諸佛受供の第二十五願と華雨樂雲の第三十二願がくわわって四十七願となり、西蔵訳では、この二願がくわわって四十九願をといっているのである。

しかし、魏唐の二訳は第十八願がすっきりしていない点はあるが、ほぼ願については同一といえるであろう。

以上に『如来会』の特徴を述べてきたが、宗祖親鸞聖人は、その主著『教行信証』やその他の著作に、他の現存本を引用されることなく、主としてこの『如来会』を三十七ヶ所<sup>3)</sup>にわたって引用されているのである。

ちなみに、源信和尚はその著『往生要集』巻下に『寶積経』（如来会卷上）云、「道樹<sup>タツ</sup>高十六億由旬<sup>ユウジュン</sup>」

一ヶ所の引用のみである。それも、佛身高と樹高がつりあわないことを問う文中に『無量寿経』や『十往生経』や『觀経』とともに引かれているもので内容的に『如来会』でなければならぬというものではない。

それに対して親鸞聖人は浄土真宗正依の『無量寿経』が主で『如来会』は二次的としての引用でなく『如来会』を佛の正意として『無量寿経』と『如来会』を同列にうけとり強い影響を受けられた次第は、『如来会』の特徴と問題点を端的に示すもので以下詳述する。

親鸞聖人は願浄土真実教文類（以下教文類と略す）に一ヶ所、願浄土真実行文類（行文類）に三ヶ所、願浄土真実信文類（信文類）に十四ヶ所、願浄土真実証文類（証文類）に二ヶ所、願浄土真実真佛土文類（真佛土文類）に二ヶ所、願浄土真実化身土文類（化身土文類）に三ヶ所と主著願浄土真実教行証文類（教行信証）に二十五ヶ所の引用であり浄土文類聚鈔に二ヶ所、愚禿鈔に一ヶ所、浄土三経往生文類広本に六ヶ所、一念多念

文意に一ヶ所、如来二種廻向文に一ヶ所、末燈鈔に一ヶ所と都合三十七ヶ所三十七回の引用である。

三十七ヶ所の引用状態を詳細に窺うと次の如くである。

(一)『無量寿如来会』言・又『如来会』言と明記しての箇所が二十ヶ所ある。

①行文類 (真宗聖教全書二巻三頁以下「二・三」と略す)

②行文類「二・六」

③行文類「二・二六」

④行文類「二・四九」

⑤行文類「二・四九」

⑥行文類「二・六〇」

⑦行文類「二・七五」

⑧証文類「二・一〇四」

⑨真佛土文類「二・一三」

⑩化身土文類「二・一四五」

⑪化身土文類「二・一五八」

⑫浄土三経往生文類広本「二・五五一」

⑬同、広本「二・五五二」

⑭同、広本「二・五五二」

⑮同、広本「二・五五二」

⑯同、広本「二・五五八」

⑰同、広本「二・五五九」

⑱如来二種廻向文「二・七三一」

⑲末燈鈔「二・六六一」

(二)『又言』と前の『如来会』を承けて引用の箇所が五ヶ所ある。

①行文類「二・六」

②行文類「二・四九」

③行文類「二・四九」

④行文類「二・七六」

⑤行文類「二・七六」

(三)『大経言』と引文しその直後に『又言』として『如来会』の引用箇所が六ヶ所ある。

①行文類「二・七一」

②行文類「二・七一」

③行文類「二・七九」

④行文類「二・九七」

⑤真佛土文類「二・一四一」

⑥化身土文類「二・一四六」

四『経言』・『又言』として『如来会』の引用が六ヶ所ある。

①行文類「二・六二」

②行文類「二・六六」

③証文類「二・一〇四」

④浄土文類聚鈔「二・四四五」

⑤浄土文類聚鈔「二・四四五」

⑥一念多念文意「二・六〇六」

このように、親鸞聖人はその著作における『如来会』の引用状態は、『無量寿経』と『如来会』は並列的で『経言』の『経』とは『無量寿経』であり、また同じ『経言』の『経』とは『如来会』である。

以上『如来会』の特徴と問題点を述べてきたが『如来会』を『無量寿経』と同列に、佛の正意としていただかれたのが浄土真宗開祖親鸞聖人である。

1 藤原宏達『浄土仏教の思想第一巻無量寿経』十一頁。

2 香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』四六頁。

3 林昭雄『親鸞聖人における無量寿如来会の受容』『真宗研究』第四十輯一三二頁。